みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

石川榮吉 (人と学問)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須藤, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5577

［人と学問］

石川榮吉

須藤健一

石川榮吉は、歴史民族学と文化人類学の理論を融合させて、オセアニアの社会と文化の動態、西欧人のオセアニア観と日本人観、そして近世日本人の異文化観と他者像を追究した民族学・文化人類学者である。京都大学文学部と同大学院文学研究科で歴史学と人文地理学を専攻する一方で、歴史民族学をも独学で研究した。そして、神戸大学、立教大学、東京都立大学（現首都大学東京）、中京大学などで教鞭をとり多くの人類学の研究者を養成してきた。学界においては、日本民族学会（現日本文化人類学会）会長をつとめるなど民族学と文化人類学の発展に貢献するとともに、「日本オセアニア学会」を創設してオセアニア学の礎を築いた。その石川榮吉先生は、二〇〇五年三月に八〇歳で亡くなられた。

一　研究者への道

石川榮吉は、一九二五年三月、東京亀戸で伸銅販売会社を営む、父石川運吉、母榮子の長男として本所に生まれた。東京府立三中（現両国高等学校）卒業後、一九四三年に戦時中のこともあり、父の郷里、弘前の旧制弘前高等学校文科乙類に入学した。高等学校時代には和辻哲郎の『風土』、高山岩雄の『文化類型学』など、文化形態学に関心をもった。しか

し、大学進学にあたっては実証的で帰納的な学問を志し、一九四五年四月に京都大学文学部史学科に入学した。高等学校在学中に召集され、相模原の陸軍通信学校幹候隊第一中隊に入隊した。終戦にともない八月に復員し、大学に復学したのは一〇月。東洋史の宮崎市定のもとで希望どおりに歴史学を学ぶことになった。そして、卒業論文では「表現主義地理学」と題する、観念的な「風土・地域のゼーレ（魂）」を把握することに力点をおいた。この文化形態学的な論文に対する指導教授の目は厳しかった。宮崎の「道を間違えたとき」には「振り出しに戻ることだよ」との一言で、つまり非実証的研究は評価せずと解釈した石川は、卒業延期を覚悟したという［石川　一九八八：一〇二］。幸いにも、一九四八年九月無事に学部を卒業することができ、一一月に大学院へ進学する。

大学院の指導教官は、宮崎のほか、社会学の臼井二尚、地理学の織田武雄であった。大学院では文学部の紀要『史林』や日本地理学会の機関誌『人文地理』の編集の仕事を受けもった。学問的には、ドイツ・オーストリア学派の歴史民族学への関心が強まり、レオ・フロベニウスの『オセアニア文化の諸形態』［一九〇〇］やフリッツ・グレープナーの『オセアニアの文化圏と文化層』［一九〇五］などを読み漁った。そして、伝播論の方法論に惹かれるとともに、太平洋の土着文化に目を開かれたのである。

一九五一年に京都大学教養部の助手に奉職する。この頃から人類学にも関心をもち、財団法人日本民族学協会（日本民族学会、現日本文化人類学会の前身）京都支部の会員になる。ここで、今西錦司、中尾佐助、川喜多二郎、梅棹忠夫、棚瀬襄爾らと知り合う。また、関西地域の青年人類学会にも加入し、霊長類学や心理学などを専攻する多くの研究者と活動をともにした。石川はこの時期に人類学・民族学の道へと引っ張り込んでくれた恩人の一人として大林太良をあげている。

そのきっかけは、岡正雄が石川の論文「フリッツ・グレーブナー――その方法論覚書」[一九五一]をドイツの歴史民族学に造詣が深い大林に薦めたことである。この付き合いを契機に、石川は大林から東京の民族学・人類学の多くの研究者を紹介された。

京都大学の助手時代に石川は人類学研究へ傾注する。それは、上司に当たる藤岡謙二郎から自然人類学、姫岡勤から文化人類学の学問的刺激を受けたからである。姫岡はマリノフスキーの民族誌など、欧米の文化人類学の文献を渉漁して『文化人類学』(一九六七年)の教科書を出している。その姫岡は海外でのフィールドワークができない時代、「文化人類学だけはやるな」と石川に再三アドバイスしたという。しかし、海外調査への情熱を貫きとおした石川は「天邪鬼だったわけでもないが」人類学を選ぶ機会をもてたことを幸運であったと述べている[石川　一九七八：一〇四―五]。

石川は、一九五三年に神戸大学文理学部に専任講師として赴任する。以後一四年間の神戸大学時代に、フィールドワークを行うなど人類学者としての研究基盤を築いた。この間の石川の研究は、歴史民族学の文化圏説から、マリノフスキー、ファース、オリバーなどのフィールドワークに基づく民族誌の読破により、メラネシアの経済、原始農耕民の居住様式、オセアニアの民族移動、原始共同体論などへと視野を広めている。それは、石川が歴史のダイナミズムを捨象した文化史学派(文化圏学派)の「系統論的」な方法論に満足せず、他方で歴史軽視の社会人類学の機能論にも飽き足らず、民族誌資料の歴史的な意味づけを行うことで新しい民族学・人類学の道を目指したからである。石川はその方法論を一九五四年に小田原で開かれた第九回日本人類学・日本民族学協会連合大会において「文化人類学におけるシンクロニック・スタディーへの若干の疑問」として発表した。

石川の発表に対して、岡正雄と石田英一郎とのあいだで「人類学と歴史」についての激しい議論があったという。それは、文化圏学派の層位学的歴史と先史考古学に基づく人類史など、人類学が対象とすべき歴史研究についての議論である。この議論は、「当時駆け出しの私にとって強烈な印象であり、私をこの上なく勇気付けるものとなった」と石川は述懐している[石川　一九七〇：二〇八]。石田との出会いを機に石川は、一九五六年に東京大学東洋文化研究所の石田研究室へ文部省の内地研究員として「留学」することになる。その研究成果の一つは、石田、石川と寺田和夫による『人類学

概説』[一九五八]の刊行である。石田は、文化人類学を自然人類学、先史考古学、民族学、言語学など関連諸学問と有機的に関連付ける「人間の総合科学」として位置づけていた。その概説書は、石田が序説を、寺田が自然人類学を、そして石川が文化人類学の分野をそれぞれ担当した。『人類学概説』は、当時、自然と文化、人類史と現代文明そして諸民族の生活を統合した人類学の教科書の嚆矢として高く評価された。この本の編集を機に石川は、寺田のほか、香原志勢、渡辺仁、渡辺直径、近藤四郎などの自然人類学の研究者と知り合っている。

東京大学における研究のもう一つの成果は、社会人類学、法社会学、法人類学の研究者と議論する場を得たことである。それが「共同体研究会」で、馬淵東一を囲み、住谷一彦、江守五夫、村武精一、そして石川の五人で構成された。当時社会科学の諸分野に影響を与えた大塚久雄の『共同体の基礎理論――経済史総論講義案』[一九五五]等をめぐって、議論を戦わせる一方で、石川はメラネシアの共同体論を展開して研究会のメンバーから「大変鍛えられた」という。この成果は、石川の学位論文『原始共同体――民族学的研究』として一九七〇年に刊行されている。

石川は、神戸に帰ってからメラネシア社会を対象に、共同体的土地所有、ムラと共同体、母系制の変化などについて民族誌に基づく研究を進めた。そして、海外調査の幸運に恵まれる。石川は日本における民族学・文化人類学の戦後初の海外学術調査隊に加わることができたのである。これが、一九六〇年にインドネシアを中心に実施された、財団法人日本民族学協会の創設二〇周年記念事業「東南アジア稲作民族文化総合調査」である。石川は馬淵の推挙によりその第二次調査隊員として、バリ島とロンボク島で調査を行った。

この調査で石川は二つのことを実感したという。一つは、バリ人とロンボク人の気風の大きな違いから民族文化の多様性を感じとったことである。そして、もう一つは、この調査がオセアニアの島々に対する石川の憧憬をかきたてたことである。ジャワ島からバリ、ロンボク、スンバワとそれぞれの島の東端に立つと東方に島影があいついでかすんで見えることを知った石川は、退官記念講演で次のように述べている。「海をわたって次の島へ行って見たいという気持ちが猛烈におこってくる。おそらく太平洋諸島民を移動にかりたてたものに、そのような気持ちがあったのではないかということを、そのときに実感した」[石川　一九八八：一〇八]。

二年後の一九六二年には、オセアニア調査の夢を実現させる。石川は、杉之原寿一らと神戸大学南太平洋諸島学術調査隊を組織して、ポリネシアの絶海の孤島が連なるマルケサス諸島で社会人類学の調査を行った。石川は、日本が太平洋の一隅に位置しながらも、日本人はアジアや欧米にのみ目を向けて日本の足もとの太平洋諸島を等閑視してきたと批判している。そして、戦前、日本が統治したミクロネシア（南洋群島）においても社会や文化に関する研究は少なく、戦後もオセアニア研究が無視されるという状況への「反発」からオセアニアを研究フィールドに選んだと述べている［石川　一九七九］。石川はその後、立教大学時代（一九六七年四月～七二年九月）、東京都立大学時代（一九七二年一〇月～一九八八年三月）においても、ニュージーランドのマオリ、インドネシアのサダン・トラジャ、南太平洋のツバルやキリバスなどで調査を行った。

二　幅広い石川の研究

石川はオセアニアの広い地域で調査を行うと同時に、広範な文献研究に基づいて幾多の優れた研究成果を発表している。石川の研究は、多岐にわたるが、四つに大別することができる。

第一は、メラネシアとインドネシア地域に焦点を当てた村落共同体と母系社会に関する理論的研究である。これは、「静態的」な人類学の視点と方法を批判した研究である。第二が、フィールドワークに基づく社会人類学的研究で、バリ、ロンボクの村落構造、サダン・トラジャの葬送儀礼、マルケサスの家族・婚姻など、緻密なデータを分析した研究である。これは、日本人によるオセアニア地域を対象とした初の民族誌、『南太平洋――民族学的研究』にまとめられている。

第三は、西欧人の「ポリネシア観」に関するもので、オセアニアと西欧との接触期の記録や資料に基づく研究である。一九七〇年代から八〇年代に行ったこの研究は「未開」と文明の出会いにおける南太平洋の社会と文化の風景を厚く描いている。それは、一九八五年に毎日出版文化賞を受賞した著書『南太平洋物語』に代表される。また、一八世後半から一九世紀初頭にかけて、南太平洋にキリスト教の宣教団や貿易商などが押し寄せ、その社会が大きく変貌する直前の社会・政治体制、人びとの生活や慣行を記述した遺稿論集『クック時代のポリネシア』［石川　二〇〇六］も刊行されている。

そして第四は、石川が海外のフィールドワークに出かけなくなった九〇年代以降に本格的に着手した、異人観ないし他者像に関する研究である。この成果は、日本人の漂流記に依拠した『日本人のオセアニア発見』〔一九九二〕と万延元年の遣米使節団の欧米周遊体験を著した『海を渡った侍たち』〔一九九七〕に集大成されている。一方で、石川は幕末から明治にかけて外国人が見た日本文化と日本人について、遺稿著書『欧米人の見た開国期日本』〔二〇〇八〕において論述している。これらの研究から、今日でも根強い日本人のオセアニア観や欧米観は、明治期前に形成されたと述べている。また、遺稿著書において石川は、鎖国によって外国には神秘の帳（とばり）に包まれてきた日本の社会や文化が、欧米人の手によって欧米世界に知らされることの意味を問い、異文化理解のあり方を考察している。

以下では、石川の研究の動向について、「共同体論」、「フィールドワークに基づく研究」、「接触時のポリネシア研究」、「異人観・他者像研究」にしぼって紹介することにする。

三　共同体論

石川の共同体論研究の主眼は、共同体の変化と発展的移行のプロセスを解明することにあった。つまり、マルクスによって提示され、多くの古代史家に支持されてきた原始共同体＝原始的土地所有に関する図式を民族誌資料によって具体的に検証することをねらったのである。人類学・民族学の調査に基づく民族誌の成果を活用して、民族学と原始・古代史との再接近を企図した石川の試みは、『原始共同体――民族学的研究』〔一九七〇〕において結実している。そこでは、未開農耕社会のメラネシアにおける村落・共同体の構成、共同体的土地所有の形態と発展、母系制から父系制への社会変化、そしてニュージーランドのマオリ社会を対象に原始共同体から農業共同体への移行についての研究が実証的かつ論理的に展開されている。

メラネシアの二〇社会の民族誌を分析した結果、石川はまず、ムラを構成する社会集団は出自によって編成され、出自集団が土地所有の単位になっている社会が支配的であると指摘する。ムラつまり共同体の形態は多様で、複数の出自集団から構成される場合が多い。そのような共同体が安定する条件は、単一の土地所有集団（出自集団）、父系出自、夫方居

住の組み合わせであることを明らかにする。それは、ムラに成員権を持つ土地所有集団と居住集団とのあいだに生ずる構造的、機能的ズレ（矛盾）を最小限にくいとめることができるからである。母系出自、妻方居住によるムラは、村内居住の男性が他者であるために、また母系出自、父方・オジ方居住は、男性がムラを移動するためにそれぞれ不安定である。

メラネシアの共同体の比較研究から、石川は父系出自・夫方居住の社会がより安定していることを見出し、次に共同体の出自と居住方式の変化の問題に取り組む。つまり、母系制から父系制へという社会変化のダイナミズムの解明である。石川は、バッフォーフェンの初期農耕社会における母系先行説を認めたうえで、母系と父系の歴史的関係についての従来の議論を検討する。既存の父系社会からの伝播・影響という文化史学派の説、あるいは母系社会における男性の経済的役割の重視といったモルガン以来の解釈では、母系から父系への移行のメカニズムを解明できないと指摘する。それにかえて石川は、共同体論の視角から共同体内の生産関係、生産手段、つまり土地所有の方式、そして集団の編成様式など、共同体を規定する出自、相続、居住の要因を統一的に把握する必要性を強調する。

この母系から父系への移行については、文化人類学の分野でも研究が蓄積されており、石川はマードックの議論を参考にする。しかし、居住様式の変化、性的分業における男性役割の優越性、男性の動産の掌握、戦争や政治的発展などの要因で母系社会が父系社会へ移行するというマードックの説に対しては、その変化の契機を社会組織の外部（人口増加、政治経済的事情等）に求めていると批判する。石川は、社会組織はその内的条件によって自立的な発展をとげるという仮説を提示する。メラネシアの母系社会のなかで妻方―オジ方居住から夫方居住へと居住様式の変更の兆しが見える例（ドブ、トロブリアンド、シウアイなどの社会）を考察して、その社会経済的な要因をさぐる。そして、社会生活や分業における男性の重要性のほかに、男性が生を受け馴れ親しんだムラに居住しようとする欲求と、最も重要な生産手段である土地を父―息子間で相続したいという願望が、母系から父系への移行の主要な要因であると、石川は自説の蓋然性を主張する。

これは、母系社会における男性の権力と地位の矛盾、つまり「母系パズル」の解消を目指す動きであり、男性が息子との「強い情緒的結合」を維持するための地位と財産の父系継承・相続の実現をさしている。石川は、その移行の歴史的な

経過や動因を「何らかの外的契機による旧来の共同体規制の弛緩」であり、内的条件としては生産力の上昇にともなう「家族（拡大家族）の自立性の高まり」であると結論づける［石川　一九五五、一九七〇：一二五］。

この石川説は、ドイツの民族学者、シュレジアーの仮説と相通ずるものがある。シュレジアーは機能主義的な研究の諸成果を歴史学的視角から再評価し、新しい意味づけを行うことを提唱し、メラネシアの「母権制」（母系制に同じ）の発展、つまり母権から父権への移行の研究を行った。そして、母権制が持つ内的矛盾の調整の結果父権制へと移行したという仮説を提示した。石川はシュレジアーの著書（一九五六年）より前に自説を発表しているが、ほぼ同じ時期にメラネシア地域を舞台にして同様な思考が東・西にそれぞれ独立に生まれたことに感激なきをえないと述べている［石川　一九七〇］。石川とシュレジアーの仮説に適合する例としては、ヤムイモ耕作からタロイモ耕作へと生業形態の変化にともない、妻方から夫方居住へ、そして母系制から父系制へと移行したヤップ社会をあげることができる。一方で、オセアニアの多くの母系社会においては、父系へではなく双系的な出自と相続・継承の方式へと変化する例も多く報告されている［須藤　一九八五］。

石川の次の大きなテーマは、原始共同体から農業共同体への歴史的展開を検証する研究である。具体的には、父系出自・相続と夫方居住に基づく（原始）共同体は、どのような条件の下で次の社会形態へ移行するのかという問題である。石川は、一九五〇～六〇年代に議論された大塚久雄の「共同体理論」やマルクス主義史観による社会発展論の図式を参考に、「家父長制的家族共同体」、つまり父系氏族制が宅地や耕地の囲い込み（私的占取）の経過を経て村落共同体＝農業共同体へ移行するとみなす。そして、土地や財の私有、相続方式の制度化等によって、父系氏族は家父長制家族、ついで個々の小家族に分解し、この過程で氏族共同体は村落共同体（農業共同体）にとって代わられるという仮説を提示するのである。

石川はこの仮説をニュージーランドのマオリ社会で検証する。二〇世紀初頭のマオリの民族誌資料に依拠して、イウイ、ハプ、ワーナウなどの親族集団と家族からなる社会組織の様態を把握する。そして、農耕などの経済生活、部族と共同体規制、居住様式と出自、拡大家族の形態等を綿密に検討し、前述の社会発展の図式と照合して次のような結論を得て

いる。マオリの部族（イウイ）社会において、共同体（ハプ）の規制や拘束を排して家族（家父長制大家族、ワーナウ）が自立する傾向を顕著に見ることができる。そこには、いわゆる農業共同体への「踏み込み」が予想されるというものである。

四　フィールドワークに基づく研究

一九六〇年のバリ、ロンボク、六二年のマルケサス、そして六八年のサダン・トラジャの調査の成果は、『南太平洋――民族学的研究』〔一九七九〕に集大成されている。バリに関しては、農民の家族と居住様式、祭祀共同体と父系出自の関係について記述し、父方居住・拡大家族の兄弟姉妹が二人だけで同宿し、思春期の娘・息子が他の家族成員とはなれて封鎖性の強い建物に起居することなど、インセストに寛容な社会であると指摘している。ロンボクのササック族の家族と居住様式については、選択居住と双系的な親族組織を特徴とすると述べている。

マルケサス調査は、ファツヒヴァ島で行った。マルケサス諸島は、平地がほとんどない火山島でフンボルト海流が岸を洗い、食料に窮することから、人間が住むには適してない環境である。現在は、仏領ポリネシアの首都タヒチ島のパペーテから飛行機に乗れば三時間ほどで到着するが、石川はコプラ運搬船で一〇日をかけてファツヒヴァにたどり着いている。人口四百人余の島社会の主食料はパンノキの実で、タロやヤムの根栽類は軽視されている。石川はファツヒヴァ社会の里子の多さに着目し、里子慣行の起源と機能を追究する。里子と里親の関係が孫と祖父母のケースが多いことから、石川はこの里子慣行が幼少年期の子女養育負担の均衡化にあり、他方で里子が老齢期の里親を扶養するという互酬的関係にあることを示唆している。この慣行がハワイやサモアなどポリネシアに共通することも比較研究によって明らかにした。オセアニアにおける養取・里子の社会人類学的調査研究は、一九七〇年代に本格化するが、石川はその一〇年前にそのテーマに着手し、理論化を試みている。

ファツヒヴァ調査ではそのほかにも、兄弟と姉妹の忌避、婚姻関係と婚外性関係について考察している。異性キョウダイが、同じ家で寝る、食事を共にすることなどをタブー視する慣行はポリネシアに広く見られ、石川はこれをインセスト

の予防手段的措置とみなしている。そして、この忌避慣行を柳田國男の日本における「妹の力」や沖縄のオナリ神信仰と比較し、姉妹が兄弟を（霊的に）庇護・祝福するという柳田説には懐疑的である。ハワイ型関係名称をもつ社会で平行イトコ婚の禁止と交差イトコ婚の許容、および男性と女性のそれぞれの義理の異性キョウダイ（男性が兄弟の妻および妻の姉妹、女性が姉妹の夫および夫の兄弟）に対する性的特権についての解釈を行っている。

石川はこのような婚姻による夫婦関係と婚外の男女間の性の共有という慣行を婚姻の原始的成立の歴史図式へ結びつける。性関係の許容範囲の縮小が、最終的に一組の男女の結合になったというものである。排他的な性関係を規定しない一夫一婦婚が原始期の婚姻形態であるという、ブリフォールトや江守五夫の説をフィールドワークのデータによって実証したのである。

インドネシア、スラウェシ島中南部の山岳地域に住むサダン・トラジャの調査は、文部省科学研究費（海外学術調査）「インドネシア村落共同体の文化・社会変化に関する文化人類学的研究」（研究代表者：別枝篤彦立教大学教授）の一環として実施された。石川は、一九六八年七月から一一月にかけて海抜千メートルの山岳部に位置し、水田と焼畑耕作を生業とする村落で調査を行う。トンコナンと呼ばれる船型住居が建ち並ぶ村落の歴史伝承、親族集団の統合の核であるトンコナンへの帰属様式、共同体と出自集団の関係、そして盛大に繰り広げられる葬送儀礼などについて数々の論文で詳細に記述している。

とりわけ石川は、少女労働に眼を奪われる。「サダン・トラジャの村々を訪れて印象深かった――というよりも、むしろショッキングだったというべきか――ことの一つに、幼女もしくは少女の労働の激しさがあった。それは、『児童虐待』と見まがうばかりのものであった」「石川　一九七九：二三一」と驚いている。少女（五歳～一三歳ころまで）は、早起きをして水汲みから掃除、脱穀・精米、コーヒーの皮むき、子守、ブタの世話までありとあらゆる単純作業を喜々として行うという。それに比して主婦の仕事は軽微であるが、炉辺での火の管理と炊事、米の管理、コーヒー豆を煎ることなどの熟練を要す。

仕事の量の点では、少女が日常生活を支え、大人が補助労働者といえるが、質の点では火と「口」（食料）の管理とい

う、家族労働において中心的で象徴的な役を受けもつのは主婦である。石川は、少女の多種多様な労働は、年齢別分業に従っており、労働の質の価値の高いものを主婦がその低いものを少女がになうということであると指摘している。

五　接触時のポリネシア研究

石川はキャプテン・クックの「航海記」など、ヨーロッパの航海者が記述した客観性の高い博物学的・民族学的な資料に依拠して一八世紀から一九世紀のポリネシア社会を洞察している。キャプテン・クックの一八六九年から三度にわたる探検航海には、著名な博物学者や写生画家らが同行しており、彼らは貴重な日記、人物、生活や風景の絵や地図などを遺している。これらの資料を参照し、西欧との接触期のポリネシアの姿を描いたのが『南太平洋物語――キャプテン・クックは何を見たか』〔一九八四〕と遺稿論集『クック時代のポリネシア――民族学的研究』〔二〇〇六〕である。前著で石川は、イレズミ、人身供犠、食人、王権、マナとタブーなどポリネシア社会に特徴的なトピックスをとりあげ、詳細に記述するとともに比較研究によってそれらの普遍的意味を明らかにしている。

なかでも、キャプテン・クックと乗組員たちが食人（カニバリズム）に異常な関心を示し、その実証実験さえ行ったことに石川は驚いている。カニバリズムは、コロンブス以降、西欧が原住民社会を「未開」「野蛮」の代名詞として位置づける証拠とされてきたからである。クックの実験は、海軍仕官がニュージーランドでマオリ人にさせたもので、同乗していたタヒチの青年は、イギリス人の破廉恥行為を許しがたいと、その仕官に罵声を浴びせたという。メラネシアやポリネシアにカニバリズムの慣行があるとはいえ、石川はクックとイギリス人たちの行為は食人そのものと変わらない「獣性」むき出しであったと批判する一方で、タヒチ青年の言動を「健全な人間の感性である」と讃えている。そして、クックに対しては人間として「高く評価する以上に深く敬愛するものであるが、それだけに右記（食人の実験――引用者記）一点だけはおよそクックらしからぬ振る舞いとして残念でならない」〔石川　一九八四：四二〕とクックを叱責している。

遺稿論集には、首長国と王国の構造、王の死後の無秩序・無法、哀悼傷身、ビーチコウマーなどをテーマにした学術的な論文が掲載されている。とりわけ、ハワイの王、タヒチの大首長などの死後に起きる略奪、破壊、放火など社会的混乱

が生じる現象を石川は、「演出された無秩序」とみなし、「王殺し」の異なる形態であると解釈している。また、ポリネシアには広く、身内や親族が死ぬと、断・剃髪、入れ墨、欠歯、裂傷など身体を傷つける習慣があった。石川は、ハワイの王妃の「痛さに耐えうるだけの死者への愛情の深さ」という説明やタヒチ島民の傷身は悲しみの深さを表すという語りなどからこの慣行を次のように解釈する。一つは、「悲しみにせよ喜びにせよ、感情の激発が肉体を傷つける形をとったものである」という。二つ目は、「哀悼のしるし、つまり喪章である」という［石川　二〇〇六：四七―四八］。

石川はキャプテン・クックが訪れた一八世紀後半からタヒチやハワイの王国が滅亡するまでのポリネシア社会のしくみや慣行の「実の姿」を信頼に足る資料に基づいて分析と解釈を加えている。この手法で特徴的なことは、航海記や探検日記などの記述の中に、現地の人の説明や言葉を見出して、その情報に基づいて石川が翻訳・解釈している点である。石川の著作『南太平洋物語』の副題は「キャプテン・クックは何を見たか」とあるが、「現地の人は何を語ったか」というほうがふさわしいといえる。

六　異人観・他者像の研究

石川が日本人の「異文化体験」、とりわけオセアニアの人びとと社会に関する日本人の見方を漂流資料によって解き明かす研究の成果『日本人のオセアニア発見』を世に出したのは一九九二年である。この研究のきっかけはマルケサス調査のときに一人の日本人がその島で命を閉じたということを耳にしたからである。このような僻遠の孤島にまで日本人が出かけていたという事実を知ってから、日本人と太平洋諸島民との接触史、さらに踏み込んで日本人の太平洋諸島民に対する認識の過程を明らかにしたいという気持ちが強くなったと石川は述べている［石川　一九九二］。

日本人による太平洋諸島についての本格的な情報提供は、若宮丸の漂流者津大夫らが立ち寄ったマルケサスとハワイに関するものが最初である。若宮丸は一七九三年（寛政五）一一月に石巻から江戸へ木材と米などを運ぶ途中に漂流した、石巻の米沢屋平之丞の八百石船である。その船は、塩屋沖で強風に襲われて舵を折り、五ヶ月間の漂流後、アリューシャン列島に漂着する。ロシア人にともなわれて一五名の乗組員は、アリューシャン、シベリアを経て、イルクーツクに八年

間滞在した後、津大夫ら一〇名がペテルブルグに向かう。彼らは一八〇三年に帝都に到達するが、津大夫ら四名が日本への帰国を申し出る。津大夫らは、ロシアの遣日使節レザノフのナデシュダ号で大西洋、南米のホーン岬から太平洋を横切って一八〇四年に長崎に帰国した。

この乗組員の体験を聞き書きしたのが大槻玄沢の『環海異聞』〔一八〇七〕である。石川はその本に記載されたマルケサスとハワイに関する情報は、「一九世紀初頭、国際的にも評価されるポリネシア民族誌」であると位置づけている。しかし、津大夫らはマルケサスに一一日、ハワイに四日滞在しただけで、しかも上陸した様子はない。艦に来る島民と接触した印象から、津大夫はマルケサス島民の裸体、入れ墨、食人慣習などについて大槻に伝えている。この話を聴いた大槻は、マルケサス島民について「未開、野蛮」とも、「獣に近い存在」などとも記述していない。石川は、「異人を公平に人類の一員としてとらえ記述している」大槻の態度に対し、「まさに人類学者の態度といってよい」と賞賛している〔石川一九九二：一二三〕。

石川はそれ以降、遣米使節団の記録にいたる六〇年間に日本人が直接に接触した太平洋諸島の島民観について整理している。接触経験のある観察者は、漂流民・庶民、アメリカで教育を受けた漂流民（ジョン・万次郎など）、そして遣米使節団の三つに類別される。そのなかで、ほとんどの漂流民と使節団は太平洋諸島民を「蔑視」している点で共通する。しかし、ジョン万次郎や使節団の一部の武士は、ハワイ、サモア、グアムの島民がアジア人ないし日本人に近いと述べているという。石川は、日本人が太平洋の島々と人びとを知ってから二百年の歴史しかなく、初期（一八〇四年～六〇年）につくられた「未開・野蛮もしくはそれに近い軽侮」という島民観が変わることなく今日に引き継がれていると指摘する。この島民観は島民との深い交流を通じて形成されたわけではなく、外見かたまたま目撃した島民の行動から判断したにすぎない。この見方は、旅行者の目と変わりなく、今日の我われの大方の異民族観、異文化観の場合も同様であると、石川は日本人の異文化認識に対して苦言を呈している。

また、暗色皮膚の人、つまり「黒ん坊」に対する日本人の認識についても検討を加える。その語が、文献上に表れるのは一六世紀中ごろの『信長公記』であるとして、その頃の「黒ん坊」は区別名称や愛称として使用されており、蔑称では

なかった。一七世紀からその語によって軽侮の表現が散見され、一八～一九世紀になると「禽獣並みの存在で人倫をわきまえない」存在という偏見・蔑視の伝統が形成されたという。石川はその原因として次の三点をあげている。一つは、ポルトガル人やオランダ人からの白人優位の受け売り、二つ目は、西欧人の奴隷ないし下僕として使役されている黒人の身分を目にしたこと、三つ目は、裸体、裸足、手で食す習慣などを「貧しさ」とみなしたことである。とりわけ、石川は黒人の衣食住の慣行や行動様式を「文化の違い」としてではなく、「文化の遅れ」として捉えた鎖国時代の日本人の黒人認識を問題視する。なかでも、新井白石は、クロンボの語源を「黒さ」ではなくセイロン島のコロンボに由来すると『采覧異言』（一七二五年）で述べている。そこから、熱帯住民＝黒ん坊＝愚鈍という差別的なイメージが定着して、今日まで継承されていると石川は指摘する［石川　一九九二：三五八］。

遺稿著書『欧米人の見た開国期日本――異文化としての庶民生活』［二〇〇八］は、欧米人の目に一九世紀後半の日本の庶民文化がどのように写ったかを検証している。欧米人の日本人観および日本文化観の追究である。当時の日本は「極東の異質な国」であった。訪日した外交官、軍人、貿易商、探検家などはそれぞれの日本滞在の経験と視点から未知の人と文化を描いている。欧米人の見方は、西洋中心主義派から中立的な文化比較派、さらには日本賛美派まであり、多様である。石川はシーボルトから、明治期のイサベラ・バードまでの四〇名が著した旅行記や日記類の記述を丹念に分析して「つくられる日本イメージ」を明らかにしている。本書は欧米人が発見した開国期の日本文化や庶民生活を通して、異文化理解とはいかなるものかを問いかけている。

パレスティナ生まれの文芸批評家、故サイードは、『オリエンタリズム』［一九七八］において、西洋のオリエント（東洋）に対する思考と支配の様式を強く批判している。それは、西洋がオリエントを自分に都合よく解釈し、ひとつの様式をもった存在として表現し、さらに植民地支配する正当化の言説をつくりあげたことに対する批判である。石川は、遺稿著書において欧米人の描いた旅行記、日記、見聞記の内容が、一枚岩的な見方や考え方に収斂しておらず、つまり「ひとつの様式」として提示していない点を強調している。彼・彼女らは、自らが目にした日本の一つの習慣や事項に関してもそれぞれ異なる解釈をし、多様に表象しているからである。

異文化とは何か？　異文化理解は可能か？という問いは、永遠に続く人類の課題かもしれない。本書において石川は、欧米人の「日本人観」を知ることは、我われが「日本文化を再発見・再認識」することにつながるという。つまり、異文化や他者理解は、自文化理解と表裏一体の関係にあるのである。その意味で、石川の異文化観研究は、日本の社会と文化を相対化し、自文化の世界を柔軟にかつ深く理解することの重要性を我われ日本人に問いかけているのである。

七　学界・学術活動

石川榮吉は学術分野や学界などの活動においては、新しい研究機関や組織などの創設に尽力された。一つは、国立の研究機関創設への貢献である。まずは、国立民族学博物館の設立である。多くの民族学・文化人類学研究者が長いあいだ切望してきた博物館建設構想は、一九六五年に日本学術会議が「国立民族学研究博物館」設立の勧告を政府に行ったことで、現実味を帯びてきた。それを受け日本民族学会も八名からなる「設立推進委員会」を設置した。石川は泉精一、梅棹忠夫らとともに委員をつとめた。そして一九六八年に文部省が国立民族学博物館の創設を認めると、石川は創設準備会議協力者、翌年六月の創設以降は、運営協議員、評議員として民博の発展とその運営に協力を惜しまなかった。また、国際日本文化研究センター設立にも深くかかわり、一九八六年創設準備委員会委員、翌年の設立以降は運営協議員としてセンターの発展に協力した。

二つ目は、「日本オセアニア学会」の設立である。石川は、戦後三〇年間、東南アジアやアフリカの調査研究の「盛況」に比べ、オセアニア研究はまことに淋しかったと、学会設立への気持ちを語っている［石川　一九七九：五］。一九七八年に設立された日本オセアニア学会は、国内外に会員三〇〇人を擁するまでに成長している。石川は、一九八二年から一〇年余二代目の会長として国際会議の開催、英文雑誌やニューズレターの発行などオセアニア研究の国際的な研究活動の拡充と発展に尽力した。三つ目は、「東京都立大学社会人類学会」の設立である。一九六五～七五年当時、大学院生などの若手研究者は学術雑誌などに研究成果を発表する機会に恵まれなかった。その状況を解消するために、石川は本学術雑誌『社会人類学年報』の発刊をするための母体として「東京都立大学社会人類学会」を設立させたのである。『社会人類学年

報』も本巻で三四巻の発行となる。

そのほか、一九七四～七五年度には第六期の日本民族学会会長をつとめられた。また、文化人類学の発展のために多様なプロジェクトや活動に協力してきた。一九七三年には沖縄国際海洋博覧会政府出展研究員としてオセアニア地域の民族資料収集のコーディネーターをつとめた。このプロジェクトは、海洋博覧会の政府出展館に展示するための民族資料収集が目的である。石川は、梅棹忠夫、大島襄二らと討議して、二〇名の大学院生を現地調査に送り出した。

一九七七年には、角川書店の支援で「黒潮の会」が企画したフィリピンから日本への「野生号」による実験航海プロジェクトの責任者として企画を成功させた。また日本映像記録センター（NAV）の民族誌映画の作成アドヴァイザーとして民間の学術企画にも積極的に協力した。石川は、それらの活動を通して自らの学術的関心を深め、実践するだけではなく、文化人類学の社会的啓蒙ないし普及をねらっていたのである。

石川は一九九五年三月に中京大学社会学部を退職されてから、地元の市川市で、「映像から見る異文化」をテーマに市民講座を開き、講師として活動されていた。講座は、日本映像記録センターが撮ったオセアニア地域の民族誌映像に調査経験をふまえた解説を加えて講釈するもので、根強い人気があり、亡くなられるまで続けられた。

このような広範な学界、学術研究や学術行政分野における石川の活動は評価されて表彰を受けている。とりわけオセアニアの民族学的研究における貢献に対しては、一九八九年七月に、「大同生命地域研究賞グランプリ」を受賞した。そして、教育的・学術的な功労に対しては、二〇〇二年一一月に「勲三等旭日中綬賞」を叙勲された。

八　石川先生のこと

石川先生が東京都立大学へ来られたとき、私は大学院博士課程にいた。研究会のあとで先生とお酒を飲むことが楽しみであった。学問論や文学論（司馬遼太郎論）などについて先生のお話が聞けたからである。今でも記憶しているのは、現地調査に基づかないで人類学者が書いたものは「まあ一五年ももてばいいところだ」と熱っぽく語られたことである。そして、日本人の視点からオセアニアの『民族誌』を書くことを我われに強く勧めた。

その際に、石川先生は二〇世紀初頭にハワイのビショップ博物館が行ったポリネシアの調査研究とその成果である『調査報告書』のことを引き合いに出した。この調査報告書は、テーマは多様だが百冊以上も出版されている。それらは、考古・先史学的資料や西欧の記録などと現実の社会・文化を記述したもので、半世紀後に現地調査を行った石川先生のポリネシア研究の「原典」ともいえる民族誌である。

石川先生は、講義や研究会などで民族社会を捉えるには、外世界との接触過程と社会の権力関係を明らかにすることが基本であると教示してくれた。我われは、その学問的視点と方法論を頭から離さずにフィールドワークで検証してきた。その研究成果を、石川先生の東京都立大学退官記念論集に反映させることにした。その論集のタイトルに、「キャプテン石川は何を見たか」という案も考えた。これは、『南太平洋物語――キャプテン・クックは何を見たか』をもじったものであるが、石川先生の民族学と人類学の研究の原点を論集の共通のテーマにという我われの気持ちのあらわれであった。結局、論集は『社会人類学の可能性Ⅰ　歴史のなかの社会』、『社会人類学の可能性Ⅱ　象徴と権力』の二巻本となり、その中で先生から薫陶を受けた我われの研究成果を示している。

オセアニアへの先生の関心は、少年時代に読んだ『冒険ダン吉』や海洋冒険小説をとおして南方へ憧れとして芽生えたようである。その気持ちは大学院時代に南太平洋の土着文化研究への端緒となった。しかし、研究に着手してみて、オセアニストがマイノリティであることへの疑問を痛感する。そこから生まれたパイオニアとして情熱が日本オセアニア学会の創設へと向かわしめたのである。一九七八年に学会が誕生し、毎年の研究大会を三月に温泉地で行うことを決めたのも石川先生である。学会の発展をめざし、先生が自ら封書の宛書をしてまで、我われ会員にメッセージを送ってくださったのを覚えている。また、関西に学会の支部をつくり、例会を開催するようにとわざわざ来られたこともある。

日本オセアニア学会は、これまでに、英文誌『*People and Culture in Oceania*』は二三号、ニューズレターは九〇号を発行している。さらに、三度にわたる国際学会と国際シンポジウムの開催、一五周年記念としての論集『オセアニア』三巻本（石川監修）の出版、三〇周年記念論集の企画（二〇〇九年三月刊行予定）など、同学会はオセアニア研究の核として活動している。このオセアニア学会、別名「温泉学会」は、石川精神が受け継がれ、毎年三月の研究大会には百名近い会

員が参加している。

石川先生は、フィールドワークを軸にした研究こそが人類学の本流であると、若い頃の我われに「強要」し、海外調査の機会もつくってくださった。しかし、石川先生ご自身は、一九七五年頃から健康を損なわれ、「体力、気力に自信を失ったところから、フィールドワークを休止せざるをえなくなった」[石川　一九九二：四二三]と、机上研究への転進をはかられた。それから先生は日欧米人の「異人観」や「異文化観」を解明する歴史的研究へとエネルギーを割かれ、五冊もの著書を公にされている。このフィールドワークに基づく文化人類学研究から近世史料に依拠した歴史研究へのシフトは、先生が実証的な歴史研究を求めて京都大学に進まれた頃への学問的回帰であるかも知れない。それは、宮崎市定先生から受けた「振り出しに戻ることだよ」という観念論的な卒業論文に対する酷評、つまり「不名誉」を「実証的な歴史研究」によって拭いさろうと試みているようにも思えるが、それは考えすぎであろうか。

談論風発、石川先生の知と徳が次世代へ継承されることを強く望むのは筆者だけではあるまい。

主要著作

著書・編著

一九五八年　『人類学概説』（共著）日本評論社
一九六四年　『南太平洋』（共著）保育社
一九七〇年　『原始共同体――民族学的研究』日本評論社
一九七八年　『南太平洋の民族学』角川書店
一九七九年　『南太平洋――民族学的研究』角川書店
一九八四年　『南太平洋物語――キャプテン・クックは何を見たか』力富書房
一九八五年　『生と死の人類学』（共編著）講談社
一九八七年　『文化人類学事典』（共編）弘文堂
一九八七年　『オセアニア世界の伝統と変貌』（民族の世界史　第一四巻）（編著）山川出版社

一九九二年　『日本人のオセアニア発見』平凡社
一九九七年　『海を渡った侍たち――万延元年の遣米使節は何を見たか』読売新聞社
二〇〇六年　『クック時代のポリネシア――民族学的研究』国立民族学博物館調査報告五九
二〇〇八年　『欧米人の見た開国期日本――異文化としての庶民生活』風響社

主要論文

一九五一年　「フリッツ・グレープナー――その方法論覚書」『人文地理』第三巻一号
一九五二年　「マオリ族の居住様式――文化圏の成立契機への一試論」『人文地理』第四巻三号
一九五三年　「マリノフスキー、メラネシアの経済と原始共産主義理論」『人文地理』第四巻六号
一九五四年　「文化圏説の初期――オセアニア研究における」『史林』第三七巻一号
一九五五年　「原始農耕民族における居住規制と村落――メラネシアについて」『研究』（神戸大学文学会）第八号
――年　「文化人類学におけるシンクロニック・スタディーへの若干の疑義」『日本人類学会・日本民族学協会連合大会第九回紀事』五
一九五六年　「原始共同体に関するノート」『研究』第一〇号
一九五七年　「メラネシアにおける「共同体的土地所有」について」『民族学研究』第二一巻三号
一九五八年　「原始農耕民族におけるムラと共同体」『人文地理』第一〇巻二号
一九五九年　「母系制より父系制へ――E. Schlesier の仮説によせて」『社会人類学』第二巻二号
一九六〇年　「第二次東南アジア稲作民族文化調査概要」『民族学研究』第二四巻四号
一九六四年　「Fatuhiva 島の人口と集落」『民族学研究』第二九巻一号
一九六五年　「Fatuhiva 島の里子慣行」『民族学研究』第二九巻四号
一九六六年　「マルケサス原住民の婚姻と性規制」『研究』第三八号
一九六八年　「バリ島およびロンボク島の農民家族と居住様式」宮本延人（編）『バリ島の研究――第二次東南アジア稲作民族文化総合調査報告書』東海大学出版会
一九六九年　「メラネシアの村落構造――土地所有を中心に」『史苑』第二九巻二号

一九七一年　「マルケサス原住民のイトコ婚について――ハンディー説批判」『織田武雄先生退官記念　人文地理学論叢』柳原書店
一九七五年　「サダン・トラジャの葬送儀礼」『社会人類学年報』第一号
一九七六年　「マルケサスのパン果文化とその源流」『えとのす』第五号
一九七七年　「共同体の原初形態」『伝統と現代』第四三号
一九八五年　「人の死をどのように悼むか――ポリネシアの哀悼傷身について」石川榮吉・岩田慶治・佐々木高明（編）『生と死の人類学』講談社
一九八六年　「馬淵先生と私――共同体研究会の頃」馬淵東一先生古稀記念論文集編集委員会（編）『馬淵東一先生古稀記念社会人類学の諸問題』第一書房
――――　「演出された無秩序」『社会学雑誌』（神戸大学社会学研究会）第三号
一九九三年　「日本のオセアニア学」石川榮吉（監修）、大塚柳太郎・片山一道・印東道子（編）『オセアニア1　島嶼に生きる』東京大学出版会

参照文献

新井白石　一七二五　『采覧異遺言』。
石川榮吉　一九五一　「フリッツ・グレープナー――その方法論覚書」『人文地理』三（一）：七六―八四。
――――　一九五五　「原始農耕民族における居住規制と村落――メラネシアについて」『研究』（神戸大学文学会）八。
――――　一九七〇　『原始共同体――民族学的研究』日本評論社。
――――　一九七九　『南太平洋――民族学的研究』角川書店。
――――　一九八四　『南太平洋物語――キャプテン・クックは何を見たか』力富書房。
――――　一九八六　「馬淵先生と私――共同体研究会の頃」馬淵東一先生古稀記念論文集編集委員会（編）『馬淵東一先生古稀記念　社会人類学の諸問題』第一書房、一五〇―一五三。
――――　一九八八　「オセアニア研究の歳月――退官記念最終講義」『社会人類学年報』一四：九七―一一六。
――――　一九九二　『日本人のオセアニア発見』平凡社。
――――　一九九七　『海を渡った侍たち――万延元年の遣米使節は何を見たか』読売新聞社。
――――　二〇〇六　『クック時代のポリネシア――民族学的

研究』国立民族学博物館調査報告五九　国立民族学博物館。
――――　二〇〇八　『欧米人の見た開国期日本――異文化としての庶民生活』風響社。
石川榮吉（監修）　一九九三　大塚柳太郎・片山一道・印東道子（編）『オセアニア1　島嶼に生きる』東京大学出版会。
――――　一九九三　須藤健一・秋道智彌・崎山理（編）『オセアニア2　伝統に生きる』東京大学出版会。
――――　一九九三　清水昭俊・吉岡政徳（編）『オセアニア3　近代に生きる』東京大学出版会。
石田英一郎・寺田和夫・石川榮吉　一九五八　『人類学概説』日本評論社。
大塚久雄　一九五五　『共同体の基礎理論――経済史総論講義案』岩波書店。
大槻玄沢　一八〇七　『環海異聞』。
サイード、E・W　一九八六　『オリエンタリズム』（板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳）平凡社。
須藤健一　一九八五「ミクロネシアにおける母系社会の変質――トラック語圏社会の出自集団の構造」『国立民族学博物館研究報告』一〇（四）：八二七―九二九。
須藤健一・山下晋司・吉岡政徳（編）　一九八八　『社会人類学の可能性I　歴史のなかの社会』弘文堂。
小川正恭・渡邊欣雄・小松和彦（編）　一九八八　『社会人類学の可能性II　象徴と権力』弘文堂。
村武精一　一九八八「石川榮吉教授の人と業績」『人文学報』二〇三：一―二三。
SCHLESIER, E. 1956 *Die Grundlagen der Klanbildung*, Berlin.

（すどう・けんいち　神戸大学）